

# 遁

第6号  
(99.3.14 発行)

# 通信

# 生

# レコード

text.the World of TONSEI RECORDS  
(<http://www.t3.rim.or.jp/~kakou/index.htm>)  
遁生レコード kakou@t3.rim.or.jp  
352-0002 新座市東 1-12-18(アダチ)

## 【ご挨拶】

シノワさんには日頃大変お世話になっております遁生レコードと申します。本日はシノワさんの公演の方で、私共の広報誌「遁生レコード通信」を御配布いただけるとのお話で誠に光栄に思っております。まずはこの場を借りましてお礼方々自己紹介を。

遁生レコードは昨年ギューンカセット様のオムニバス「あぶない音楽」の方にも収録していただきましたブランを擁する弱小レーベルでございます。シノワさんとはこのオムニバスでの共演がご縁で親しくさせていただくようになりました。

ブランは大阪の方へー昨年、昨年と年1回ペースでお邪魔しております。

レーベル主旨といたしましては「狂気・内向・暴力・繊細の同居する音楽を模索する」などというものを掲げております。カセット中心の音源リリース、所属バンドのライブ会場、Web「The World of TONSEI RECORDS」(<http://www.t3.rim.or.jp/~kakou/index.htm>)での広報活動を中心に地味ながらやっております。

このWebの方では遁レコの情報はもちろんですが、その他にもシノワの平田氏、山内女史を始めたくさんの方に執筆、連載をしていただいております。実際レーベル情報よりも連載陣の読み物の割合の方が多く、こちらの方で好評をいただいております。インターネットをご利用の方は是非一度ご覧になっていただけましたら幸いです。

この「遁生レコード通信」はレーベル情報とWeb掲載のコンテンツの一部をダイジェストでお届けするものです。もしお気に召されましたら定期的に発行していこうかと考えております。ご希望の方は上記住所までご連絡願います。そんなわけでシノワの演奏をお楽しみ下さい。

## 【リリース情報】

遁レコ作品購入ご希望の方は代金を遁レコ(352-0002 新座市東 1-12-18 アダチ)までお送り願います。折り返し商品を郵送させていただきます。

遁レコ発の CD 作品

可幸月貝

「fragment '95-'98」(TORCD-1)

98.12. 発表

1,000 円(送料+手数料込)

「可幸月貝」(遁-6)から2年半、遁生、ブランの活動と平行して録り貯めたソロ 宅録作品の集大成。前作から3曲、遁生時代のデモ、ブランのボツ曲のセルフカバー、その他新曲多数の充実の内容。全編湿り気と歪んだ映像に包まれてた超私的な音世界。

【収録曲】intro/甘い煙/空っぽの僕/小サナ瓶/中デ僕八眠ル/君/可愛い君/僕八狂ッテナンカイナイ/blue sunday/outro

bran "live"

リマスターにて再発

ブラン

「live」(TORCD-2)

1,000 円(送料+手数料込)

これまでカセットでリリースしてきた98年6

月のギューンカセットオムニバス「あぶない音楽」発売記念ライブでの演奏を収録した「ブラン at Fandango 980621」(遁-11)と、遁生から改名後発の公演となった97年4月高円寺20000Vでの演奏を収録した「ブラン 9704」(遁-10)のカップリング2 in1CD。

【収録曲】オレハ貝ニナル/夢うつつ/君をさらって/Lorca(仮題)/夢/自爆 他



全国インディ取扱店にて発売中 / 在庫僅少?

gyuune phycodelic sampler

「あぶない音楽」(gyuune cassetteCD95-13)

98.5.25. 発表

2,500 円(税別)

\* こちらは遁生レコードでは取り扱っておりません。ご了承願います。

ブラン(ex. 遁生)、97年大阪遠征時レコーディング音源より「自爆」を収録。ギューンカセットで年一回製作しているサイケオムニバス。

<収録バンド>

シノワ / 奇島残月と無礼人 / Mady Gula Blue Heaven / Rare Phycodelic Off / タバタミツル / サイケデリックジャンパー / ソン / ずこうびじもく / アンティークフォークロア / 毘太・セクスアリス

## 【トレモロ家族】

平田 徳雨(シノワ)

第5回 BOB LIND

SONNY&CHERは「I GOT YOU BABE」や「THE BEAT GOES ON」で有名な夫婦フォークロックデュオで(後に離婚されますが...)皆様もよく御存知かと思ます。その妻のCHERはデュオの時代よりソロ活動を行い、60年代には旦那の協力のもと素晴らしいレコードを作っております。「BANG BANG」はメロドラマ的な名曲ですね。

CHERの声は、ジェファーソンエアプレイン時のグレース・スリク~ニコの系譜に列なるものでしょう。60年代のCHERのソロアルバムは、ジミー・ペイジプロデュース、ニコの「I'm not sayin'」(イミディエイトのシングルコレクションなどに収録される、奇跡の名曲)の世界をアルバム化したかのような仕上がりとなっております。それらは素晴らしいアルバムばかりで、個人的には旦那とのアルバムよりも格段に気に入っております。



そして、60年代のCHERの素晴らしいアルバムの中でも特に秀逸なのが「THE SONNY SIDE OF CHER」(IMPERIAL LP - 9301)です。ちなみにこのアルバムのCDは残念ながら現在廃盤のようです。

このアルバムには「IT'S NOT UNUSUAL」という本当に素晴らしい曲が収録されているのですが(是非御一聴を!)この曲のライターはなんと「G.Mills - L.Reed」となっているのです。「G.Mills」はともかく「L.Reed」とはあの「L.Reed」なのではないでしょうか?

あっさり問題は解決いたしました。この曲はトム・ジョーンズの有名な曲(邦題は「よくあることさ」)らしく、他にも多くカバーされた有名曲だったのです。そして、「L.Reed」なる人物もどうやら全くの別人みたいで、ハーマーズハミッツ、カーペンターズでおなじみの「THE KIND OF HUSH」の原作者だそうです。最近300円で購入した森山良子のカバー曲アルバムに収録されている「THE LAST WALTZ」という曲の作者も「L.Reed」で(この曲も良いのですがオリジナルは現在特定出来てません。情報をお待ちしております)この「L.Reed」はかなりの凄腕作曲家のようです。「ルー・リード」とは別人ということで残念でしたが、こっこの「L.Reed」も要チェックですね。

またこのアルバムには「BANG BANG」や「イパネマの娘」「LIKE A ROLLING STONE」のカバーなども収録されております。

さらに極めつけとして、激しすぎるドラムが炸裂する上に極上のメロディーが乗るといふ、90年代のキャッチーなパンクバンドを30年も先取りした万人必聴の名曲「COME TO YOUR WINDOW」が収録されています。(パンクな友人もこの曲には殺られてました)

この「COME TO YOUR WINDOW」の作者がBOB LIND だったのです。これがBOB LINDとの最初の出会いでした。「COME TO YOUR WINDOW」を聴いてからというもの、作曲職人なのか、シンガーなのかも分からない、得体の知れないこのBOB LINDの存在が自分のなかでどうしようもなく大きくなっていった訳であります。こういう時に役立つのがタワーの検索機です(前述の「IT'S NOT UNUSUAL」も勿論この手段を使用)、検索の結果、BOB LINDはシンガーでした。ベスト盤も出てました。

しかし、あんな名曲を書くシンガー、BOB LINDについて、雑誌やフォーク、フォークロックの紹介本などで見かけることは今まで一度もありませんでした。あまり評価がなされていないシンガーなのでしょうか? 兎にも角にも音源を聴くまではわかりません。

それからしばらくBOB LINDのCD、レコードは見つけることができなかつたのですが、探し始めて半年後、偶然立ち寄った梅田の中古レコード店にてレコードを発見し、即買いしました。そんなに高価なレコードでもなかつたのです。ジャケットには、ギターを抱えた純朴ながらも冴えないシンガーの写真が大きくありました。これがBOB LINDか! と大感激したものです。(後にわかつたのですが、これは1stでした。)

早速聴いてみると、なんとなんと予想を越える本当に素晴らしい曲の連続なのです。とにかく曲が美しく切ないのです。ミック・ジャガーとディランにルーリードを加え、柔らかくしたような声はアシッドフォーク的でもあります。実はこのアルバムのプロデューサーはジャック・ニッチェ。BOB LINDのこのアルバムは、あのWALL OF SOUNDのフォーク版だったのです。とんでもないシンガーを知ってしまったと、これまた感激いたしました。

このアルバムの冒頭に収録されている「ELUSIVE BUTTERFLY」はどこかで聴いたことがある曲だと思ったら、「COME TO YOUR WINDOW」と同アルバムに入っていた曲だったのです。「COME TO YOUR WINDOW」に気を取られ過ぎて気が付かなかつたのです。

この「ELUSIVE BUTTERFLY」は大ヒット曲だったということを知りました。「夢の蝶々」という邦題で当時日本盤も出ていたようです。全米の過去のヒット曲を編年体で紹介する本(はっきりした書名は忘れましたが)にBOB LINDの記事を見つけました。1966年3月12~19日にかけて「ELUSIVE BUTTERFLY」はビルボードチャートの5位になっており、一時はポストディランといわれたそうですが、続くヒット曲がなく消えていったシンガーだということです。そして「ELUSIVE BUTTERFLY」については、「フォークロックと呼ぶにはソフィスティケートされた曲。イントロのギターに続いてボブのVOは優しさに満ち溢れている。ストリングスの響きも心地良い。ソフトロックとフォークロックの架け橋的存在」と評されています。また、自作デモテープを自ら売り込み、リパティレコードが興味をしめし、リパティ傘下のワールドパシフィックよりデビューしたとのこと。また「ELUSIVE BUTTERFLY」のバックにはレオン・ラッセルが参加しているようです。(「ELUSIVE BUTTERFLY」はThe Blues Project, The Yardbirds, Aretha Franklin, Glen Campbell, Cher, Lou Chritie, Dolly Partonなどがカバーをしているようです。)

この後、続々とBOB LINDのアルバムを発見することができました。前述のものも含め計4枚のアルバムを入手しました。実はこの4枚でBOB LINDのアルバムは総べてのようです。なんと、ネット上にてBOB LINDのサイトを発見したので。そこに詳細なディスコグラフィがあったのです。これには大変驚きました。本文を書くにあたってサイトを今一度確認しようとしたのですが、つながりません。

消えてしまっている可能性がありますURLをのせておきます。

1. <http://www.geophysics.dias.ie/~gb/html/lind.html>
2. <http://atlas.cp.dias.ie/~gb/html/update.html>

(URLが二つある? 詳細不明です。)

当方で完全保存してありますので、ご希望の方はお申し付け下さい。転送いたします。

このサイトにBOB LINDに関する情報はほぼ網羅されているものと思われ、このサイトを見ていただければ一発で事は済みます。

あえて抜書きすると、BOB LINDは現在、アメリカのフロリダに住んでおり、WEEKLY WORLD NEWS紙へ執筆をしてられるそうです(何について書いてるのかは不明)。また、ミステリー小説を最近書き終えられたようです。なんと、このことはBOB LINDよりサイトに直にメールが届き、伝えられたことだそうです。このサイト名は「THE UNOFFICIAL BOB LIND WWW INFOEST SITE」というのですが、BOB LINDがこのサイトを見つけ、メールを送ったために「OFFICIAL」に認定された模様です。このサイトは熱狂的BOB LIND信仰者のためのページなので大変熱い内容となっております。是非御覧下さい。

BOB LINDのレコードの権利はワールドパシフィックのみならず、何故かライバルレーベルだったVERVEにもあったようで(詳しい経緯は分かりませんが)、二つのレーベルから同時期に作品をリリースするという非情にややこしい状況が生じています。実際1966年にはアルバムが二つのレーベルより出ており、シングルも同様のようです。

しかし、両方ともにリンドさんの魅力は爆発しております。さらに、リンドさんは1966より、お薬とお酒にハマられていったようです。複雑な契約の疲れでしょう。

そして、突如71年に出たアルバム「Since There Were Circles」はレーベルも移籍して気分一新のはずだったのですが、残念ながら時すでに遅し。時代はリンドさんを受け入れなかつたのであります。この後再び「ELUSIVE BUTTERFLY」をシングルでリリースし、シーンから消えてしまうのです。この「Since There Were Circles」は、アカベラから始まる、リンドさんとしては骨太な好アルバムなのですが...

単純な比較は出来ませんが、僕はディランよりもリンドの方が断然好きです。決して一発屋ではない、リンドさんのパーフェクトな再発を心より願っています。

結局、「COME TO YOUR WINDOW」はリンドさん自身が唄った曲ではなく、CHERに書き下ろした曲のようです。CHERのソロアルバムをリリースしたレーベルIMPERIALはリンドさんのレーベル、ワールドパシフィックと兄弟関係にあり(親会社はリパティ)、ジャック・ニッチェとCHERの旦那SONNY BONOの縁もあって、時の人であったリンドさんはCHERに曲を提供したのでしょう。しかし、本人に唄って欲かつたです。

- ここで、ディスコグラフィ。無断転載ですが。
- SINGLES:
- Roads of Anger b/w To my Elders With Respect. Oct 1965.
  - Elusive Butterfly b/w Cheryl's Goin' Home. Nov 19 1965.
  - Remember The Rain b/w Truly Julies Blues. March 25 1966.
  - Wandering b/w Hey Nellie Nellie. May 30 1966.
  - San Francisco Woman b/w Oh Babe Take me Home. August 1966.

White Snow b/w Black Night.  
Sep 26 1966.  
It's Just my Love b/w Goodtime Special.  
March 17 1967.  
Goodbye Neon Lights b/w We may Have Touched.  
Jan 1968.  
She can get Along b/w Theme From the Music box.  
Aug 23 1971.  
Elusive Butterfly b/w Truly Julies Blues.  
Nov 1972.

EP's:

Don't be concerned (Feb 1966).  
Side 1: 1. Elusive Butterfly 2. Cheryl's Goin' Home 3. Dale Anne.  
Side 2: 1. You Should Have Seen it. 2. Counting. 3. Truly Julies blues.



ALBUMS:

《Don't be concerned》(Feb 1966).  
Side 1: 1. Elusive Butterfly 2. Mister Zero. 3. You Should Have Seen it. 4. Counting. 5. Drifter's Sunrise. 6. Unlock the Door.  
Side 2: 1. Truly Julies Blues. 2. Dale Anne 3. The World is Just a "B" Movie. 4. Cheryl's Goin' Home. 5. It Wasn't Just the Morning. 6. I Can't Walk Roads of Anger.  
このアルバムは本当に充実した曲が揃っております。リンドさんのメロディーには心打たれます。大ヒット曲A - 1のみならずA - 3、5、B - 1の切なさには涙するでしょう。とにかく飽きるということがありません。リンドさんのアルバムをかければなしにするのは最高に気持ち良いです。楽器の絡みといい、アレンジが絶妙。さらに、小さくバンジョーの音を入れてまして、これが効果大です。まさに奇跡の名盤と呼ぶにふさわしいでしょう。ここまでストリングスが美しく響き、かつゴージャスになり過ぎず、リンドの声質も最大限に生かすアレンジは、Wall of Soundの一つの完成形だといえましょう。リンドさんは70年代のニルソン等のシンガーソングライターの先駆的存在と位置付けられるのでは。B - 4なんかは同時期のガレージサウンドに通じるものがあります。ガレージバンドのアルバムに何曲か入っている、キャッチーなフォークロック的な曲をイメージしていただければよいと思います。



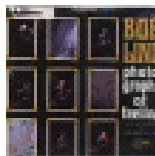
《The Elusive Bob Lind》(May 1966)

Side 1: 1. Fennario. 2. Wandering. 3. The Times They are a Changin'. 4. Black Night. 5. White Snow. 6. Cool Summer. Side 2: 1. Hey Nellie Nellie. 2. The Swan. 3. What Color are you ?4. Gold Mine Blues. 5. Hard Road.

前述の通り、二重契約の産物です。1stをかなり意識した作りがなされていますが、ジャック・ニッチェのプロデュースではないため、ストリングスのアレンジは前作とは比べ物になりません。相変わらずリンドさんの曲、声は冴えています。ギターが前に出るシブブルなアレンジが随所に見られ、前作に比べフォークシンガーとしてのリンドさんが強調されているようです。また、内向的な暗い曲が増えます(リンドさんのメロディーの良さは、適度な暗さに見え隠れする美しさにあると思います)。

聴きどころはB - 3でしょう。同じリフが最後まで永遠繰り返され、吹き系のVOが絡む、ベルベットアンダーグラウンド的な名曲です。リンド風アシッドフォークといったところでしょうか。

《Photographs of Feeling》(August 1966)

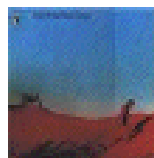


Side 1: 1. San Francisco Woman. 2. A Nameless Request. 3. West Virginia Summer Child. 4. Go ask Your man. 5. Remeber the Rain.  
Side 2: 1. I Just let it Take me. 2. The World is Just a "B" Movie Meets Reno Funtown USA. 3. We've Never Spoken. 4. Oh Babe Take me

Home. 5. Eleanor.

このアルバムは楽しいオールドアメリカンな曲A - 1から始まりまず。少しイメチェンしたかと思いつつもA - 2からはいつものリンド節です(よかった)。夢見心地な音です。さすがジャック・ニッチェですね。カントリーのアプローチが多く見られるのが3rdの特徴だといえるでしょう。バンジョーが比較的大きくMIXされる曲が増えます。2ndでは、ギターが前に出る曲もあったのですが、1st同様、3rdでは全くなりません。両方ともかなりジャック・ニッチェによって作られたっぽいですが、勿論結果は良しです。本人はどうだったのでしょうか？

《Since There Were Circles》(April 15 1971)



Side 1: Medley: a. I Love to Sing b. Sweet Harriet. 2. City Scenes. 3. Love Came Riding. 4. Loser. 5. Not That I Would Want her Back. 6. Theme From the Music box.

Side 2: 1. Anymore. 2. Spilling Over. 3. She can get Along. 4. Up in the Morning me. 5. Since There Were Circles.

問題の4作目です。ライナー付きで歌詞も楽しめます。A - 1のアカペライントロには驚きました。明らかに声に粘りが生じてます。続くのは「ELUSIVE BUTTERFLY」のカントリー風焼き直し。大滝詠一セルフカバー的です。A - 2はベースが最高(Carol Kayeです)。A - 4はサザンロック風です。またA - 5は同時期のフェイスズ、ストーンズ風。このアルバムは今までの基本リンドさんメロディーに70年代初期のロックサウンドが乗るというなかなかの好盤に仕上がっています。しかし、地味なイメージは拭きたいと思えます。結果的に最後の曲となってしまったアルバムタイトル曲B - 5はアコギ一本で唄うリンドさんが聴けます。フォークシンガーであったはずなのに、この曲が唯一のベタなフォークソングとなってしまったリンドさんは本当に不思議で魅力的なフォークシンガーです。(98.10.3.)

\* 通レコサイト好評連載中!

## 【俺雑記】

第3回 屁音楽

最近出た志村けんの自伝エッセイ「変なおじさん」(日経BP社)に「やっぱり屁の音は本物に限る」というものがある、志村がまだドリフターズに入り立ての頃、コントで使う屁の音がそれまでラッパの音だったのがイヤで本物の屁の音に変えてもらったという記述があった。

幼い頃から「全員集合」は毎週欠かさず見ていたものだが、私の記憶する時点ではもう既に志村加入からずいぶん経っており、荒井注脱退後、志村が最初なかなか世間から認められず「あの新入りつまんねえな」などと云われていたなんて全く知らないわけで、当然ラッパで奏でられるの屁の音など知る由もない。

満員の公開録画の会場全体に響き渡るあの尻上がりの「ブ〜」という音や下腹に響く「ブッ」というあまりにリアルなあの音こそが「全員集合」の屁の音であり、ドリフの屁の音だった。それが本物の屁の音であったことを尻、もとい知り、だからこそそれが大音量でオーバーに流されるからこそ我々は腹を抱えて笑うことが出来たのだと妙に納得した。

この本の中で志村は屁について何度か述べているが、例えば新人アイドルが番組に出演する際、志村はまずその子の前で屁をしてみると云う。彼女がそれに対して大笑いするなら一緒にコントで絡めると判断する。イヤな顔をする子は一緒に出来ないことが多いとか。また志村が以前メキシコに行った際、現地の家族と一夜を共にすることになったが、言葉は通じず、また何をやっても笑いやしない。そんな中、何かの拍子で屁をしたら一同の緊張が一気にほぐれ、とたんに打ち解けることが出来たと云う。「屁は万国共通のギャグ」とは志村自身の弁だが、確かにその通りかもしれない。私も外国で困った時はしばしば屁をすることにしよう。

そんなわけでドリフの屁の音は志村自身のものを録音したものだっ

たのかと思ったら、そうでもなかった。屁の音を集めたレコードを使っているのだそう。どこかの大学教授が集めた一番長い屁だと一番高い音の屁だと様々な屁のバリエーションが丸々一枚に詰まっているとのこと。この教授、自分の生徒を家に呼び、様々な食べ物を与えては「屁を出せ」と迫ったそう。あきれた奥さんが離婚を決意したところ「別れてもいいがその前に屁をしていけ」と云ったものだから、さらにあきれて別れるのをあきらめたというから大したもの。屁は人の心をもつなぎ止めるわけだ。

事実、古今東西このつかみ所のない屁に並々ならぬ関心を示した者は多数あり、あのエレクトリック平賀源内も「放屁論」を書いている。屁に関する本を挙げればきりが無いが、名奇書としていたるところで語られる福富織部「屁」(「おなら」と読む。双文館 / 1926年初版)がまず筆頭にあげられることだろう。私自身未読で恐縮であるが、新聞、説話集、落語などありとあらゆるものから屁に関するエピソードを集めた屁の集大成作品である。福富は実体がよくつかめていない人物で本名が「松木実」であることまではわかっているが、彼が一体何者であったのかということは知られていない。「屁」の謝辞には責め絵師の伊藤晴雨や「滑稽新聞」でおなじみ宮武骸骨も一文を寄せているというからますます気になる。屁の文献を当たると松木実の正体を追った話を頻りに目にするのが出来るので興味を持った方は当たってみると良いだろう。ちなみに「屁」は随分売れた本らしく、古書店で未だ安価で容易に入手出来るらしい。また福富織部こと松木実には「禪」(ふんどし)、「臍」(へそ)という著作もある。ますますその人物像に惹かれるものを感じてしまう。永井荷風が「四畳半襖の下張」を、芥川龍之介が「赤い帽子の女」というボルノ小説をそれぞれ変名で書いたとされるように、あつと驚く人物が福富織部の正体であったらと期待してみたりもする。

最近出たものでは佐藤清彦「おなら考」(青弓社 / 1994年初版)がある。これぞ現代の「屁」であるのだが、著者は福富織部の「屁」の存在を知りながら未読の状態での執筆の準備を進め、その途中で「屁」をやっと読むことが出来、集めたエピソードの内、民話の大部分が既に「屁」に掲載されていて愕然としたそう。それを差し引いても福富織部が語り得ないこの現代までの屁のエピソードがまとめてある貴重な一冊である。屁好きの方は一読をお薦めする。

そんなわけで本題に戻るが、志村の著書を読み、私は屁の音を集めたレコードの存在に大いに関心を抱いた。屁は言葉で表すものではないのだ。音で発せられるからこそ屁の存在意義がある。故意にスリして出される屁など屁の風上にも置けない。屁に対して失礼だ。あのダリもアメリカの放屁家クラブとやらで作った屁の音を集めたレコードを大切にしていたという。ちなみに彼は「トランペット伯爵」というペンネームで「放屁術」という著作を残してもいるということを知ったことがある。

「おなら考」の中に屁のレコード、カセットに関するエピソードが収録されていた。「テレビのバラエティーなどで(中略)あの(屁の)音はだいたい、このテープからとられており」(123ページ)とあるから、「これがドリフの屁の音か!？」と期待したのだが、残念ながら件の大学教授のエピソードではなかった。

登場するのは作曲家の和田則彦氏。正確には音響デザイナーという呼び方が正しいそうだが。彼が屁の音を集めたきっかけは、東京芸大の学生時代にさかのぼる。昭和20年代後半彼はアルバイトで苦しんで当時とてつもなく高価だったテープレコーダーを買ったそう。おまけにテープ代も高い。ピアノ曲などを録音し、テープにほんのちょっと余りが出たりすると、それがもったいなくて仕方がない。その短い余りに何を入れようか、そこで思いついたのが自分の屁の音。これが集め出したら面白い。彼はどんどのめり込んで行き、他人に頼んで屁の音を拝借するようになったという。

彼は集めに集めた屁の音を音響デザイナーの腕で電子音楽と融合し

「ウインドロージー」として1971年音響デザイナー協会の音展で初めて世に問うた。テープで「ウインドロージー」が流される中、会場内に屁の臭いが満ちてきたという伝説があるらしい。事の真偽はともかく、この件に関して著者は3つの解釈が可能であるとして、その第一に

「『黄色い声』という言葉があるように、音を聴くと色が見えることがある。これになぞらえていえば、「臭聴」というものがあり、音を聞くとにおいがしてくるということも、あるのではなからうか」(120ページ)

と述べている。大変興味惹かれるテーマである。この件に関して誰か研究している人はいないだろうか。

そんなわけで和田氏は同様の手法でレコード「ワンダーブルーランド」(東芝EMI/1978年)、カセット「まるで屁のようなカセット」(ポニーキャニオン/1984年)という作品を残している。自作曲はもちろぬ「黄色いサクランボ」のカバー、ソロによる「ぞうさん」など実に多彩な内容のようで、極めつけは「軍艦マーチ」に乗せて女子大生、OLなどの若い女性が「7発目標がんばりまーす!」などと掛け声の後に次々と屁を放つ「放屁軍団」。軍艦マーチ、明るい掛け声、そして屁。何ともエロティックな感情を抱いてしまうのは私だけであろうか。中古盤店で見付けた方は是非ご一報いただきたい。

この和田則彦という人物、全く知らなかった人物なのだが、どうも電子音楽の世界ではかなり有名な方らしい。どこの出版社かは調べられなかったが今年8月に出た「電子音楽イン・ジャパン 1955 - 1981」という本に「重要な証言者」として富田勲、ミッキー吉野、鈴木慶一、平沢進、佐久間正英と並んで和田氏が登場しているようだ。

他にも「続 ミュージックシンセサイザ入門」(オーム社 / 1979年)という三枝文夫という方との共著作もある。

大した調査もしていないので同姓同名の別人だったら申し訳ないが、「おなら考」の文章から和田氏が電子音楽界と深い関わりを持った人物であることは間違いないので多分大丈夫だろう。

音展での「ウインドロージー」発表が1972年、「ワンダーブルーランド」が1978年、「まるで屁のようなカセット」が1984年。和田氏の屁音楽の発表周期は6年であることがわかる。1992年に何らかの動きがあったかどうかはわからない(この本の和田氏取材は1992年)が、だとすると次は1998年・・・つまり今年である。是非和田氏の屁新作を聴いてみたい。世知辛い昨今の風潮の中、和田氏の屁音楽で世の中を和ませて欲しいものである。

また最後に、敬愛する松沢呉一の名著「鬼と蠅叩き」(翔泳社 / 1995年)に屁の映像化に挑んだ唯一の本と思われるスカトロ系エロ雑誌「ビーバップオナラ」(KKジャクソン / 発行年不明)が紹介されていたことを付け加えておく。

「(特殊器具でモデルが)肛門内に空気を入れて、シャボン玉や風船を膨らませる、ストローでコップの中に泡を作る、白い粉を舞わせる、といった方法で屁を映像化している」(14ページ)そう。こちらも屁マニアには見逃せないアイテムだろう。

放たれた瞬間にかすかな香りを残して消えていく屁にもものあわれを感じ、それを何とかして形あるモノに残そうとする様々人物の試みに、笑い飛ばしては済ませない何かを感じるのは私だけであろうか。

無駄に屁をする事なかれ。己から湧き出たものの音を楽しみ、願わくば他人を微笑ませよ。そんな時は無臭が一番。

屁のたしなみ・・・男の贅沢。(98.11.6.)

遁生レコード通信第6号  
発行 / 99.3.14. 不定期刊  
発行者 / 遁生レコード  
352-0002 新座市東1-12-18(アダチ)  
kakou@t3.rim.or.jp  
Text. ・The World Of TONSEI RECORDS  
(<http://www.t3.rim.or.jp/~kakou/index.htm>)